



シリーズ

TACという懸け橋

Vol.

3

「買ってくれる人」がいるからこそ、農業を続けることができる。生産者と手を携えながら、消費者とのさらなる結びつきを求め、日々奮闘するTACの姿を追う。

☐ 福岡県 JAにじ／JA全農ふくれん

☐ 新潟県 JA胎内市／JA全農にいがた

☒ 静岡県 JAとびあ浜松／静岡県JA営農センター

☐ 滋賀県 JA北びわこ／JA全農しが

☐ 愛媛県 JA西条／JA全農えひめ

☐ 宮城県 JAあさひな／JA全農みやぎ

☐ 岩手県 JA新いわて／JA全農いわて


ミカン生産者 宮司洋輔(上)
JAとびあ浜松 安間利貴(中)
JAとびあ浜松 中村香織(下)④

若手グループによる大苗定植作業の風景。⑤

TACと担手の年齢も近く、コミュニケーションも深まっている。⑥

老木園地を解消する

「園地の若返りを図りたい……」

平成21年。JAとびあ浜松のTAC・中村香織は、ミカンを栽培するある若手後継者のつぶやきを耳にした。

管内のミカン栽培は、「生産者の高齢化」だけでなく、「園地の老木化」も大きな課題になっていた。老木園地では生産量が減り、果実の品質も下がってしまう。老木園地の解消には、老木を伐採し新しい苗木を植える「改植」しかない。しかし、その作業は時間と手間がかかるため、個人で簡単に取り組むことは難しい。中村は湖北営農センターのメンバーと相談しながら、具体的な対策を講じることにした。

通常一年生の苗で改植をすると、育成期間が長くなり、数年の未収入期間が発生してしまう。そこで、四年生の大苗を提供し早期に収入が見込める仕組みを考案した。

中村たちは、大苗の育成・改植作業の請け負いを、ミカンを栽培する若手後継者のグループに提案することにした。当時を振り返って中村は言う。「話を切り出すときは緊張しました。自分の農園の作業で手一杯の中、さらなる作業を受け入れてくれるか、と」。しかしそれは杞憂にすぎなかった。若手グループの答えは「それじゃあ、やってみよ

う」。新しいことに挑戦する気概がそこにはあった。

若手の交流の場ができた

平成22年から25年にかけての3年間では、いくつかの成果を上げることができた。青島温州の二年生の苗木2,000本を2年間育苗し、四年生苗木(大苗)として、1,808本を希望する担い手に供給。401.7aの改植が進み、全体の栽培面積も拡大した。「改植しなければならない」と考えながら先延ばししていた他の担い手からも大きく評価された。

若手グループにとっても、取り組む意義はあった。育苗・改植作業を通じて、若手同士やTACが顔を合わせる機会が

多くなり、交流が以前にも増して図られた。若手グループのメンバーで就農して3年になる宮司洋輔は言う。「普段はひとりりで作業するので、メンバーと協力しながら行う作業が楽しかったです。地域の人たちから感謝されるので、やりがいも感じました」。

中村が今後目指すのは、長期的な収益の確保だ。「ミカンは1年に1回しかならないもの。地域のみなさんをはじめ、お客様には大事に食べてほしい」。若手グループとともに、販売活動や経営の勉強に注力していきたいと考えている。「みんなで力を合わせながら、地域の中で胸が張れる仕事ができるように」と中村は今日も汗を流す。



第8回JAグループ
国産農畜産物商談会

2014年3月12日(水)10:00~17:00/13日(木)10:00~16:00
東京国際フォーラム展示ホール ③ JA全農/JAバンク/JA全中



TAC(タック)とは、『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の愛称です。

TACの
役割

- ①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
- ②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
- ③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。

TACの
由来

Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって
地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL: 03-6271-8276
www.zennoh.or.jp

全農